

### コラム 33 :【境界線①】

自分の世界と、他の人の世界との境界線についてお話します。

国境の場合には、国同士で相互に自分の範囲が定められ「不可侵」が約束されていますが、家族の場合は「親しいが故」「責任を負わねばならないが故」一方的に境界線を越えることがあります。

ワケも聞かずに叱る、危ないからと話し合わずに、子どもからの「やってみたい！」を一方的に拒否するなど、自分の子ども時代を振り返ると「私も親から同じことされたな」と思う人もいないではないでしょうか。

反抗期があった子ども、あるいは自分で進学・就労を決めるタイプの子どもの場合は、この『境界線を越えての口出し』をする機会は少ないと思います。

しかし、自分で決められず足踏みを続ける子どもには、心配になって、説教や説得をしたり、否定の言葉が出たりするなど『境界線を越えての口出し』をしてしまうことがあると思います。その結果、生活の全てが親がかりになってしまうことは、現実には往々にしてあることです。

「(子どもは何も言わないのだからと) 子どもの意見を聞かずに、親が決定する」「子どものやり方が未熟だと説教する」「仕方がない、可哀相だと思い、子ども自身でしなくてはいけないことを親が代わりにしてしまう」などの行為は、親が子どもとの境界線を無断で越えていると考えてください。境界線を「国境」だと考えると、無断では越えにくくなりませんか。